

進級、新入園おめでとうございます。いっしょに楽しい保育園生活を築いていきましょうね。

さて、私たちの河内からたち保育園は、1980年に開園し、多くの方々に支えられながら、この4月より創立42年目に入りました。これまでの卒園児は576人です。今回は当園の創立にまつわるお話をお伝えしようと思います。

なぜ今回、このようなテーマにしたかと申しますと、この保育園創立の発端となった私の伯父(私の母の兄)である清田 賢(きよた さかし)が、去る4月2日に92歳で召天しました。伯父は、当法人(園)において何の役職にも就かず、報酬も一切得ることがなかったので、表に出ることはほとんどありませんでしたが、この伯父が「保育園をつくる」と言い出さなければ、ここに、河内からたち保育園は存在しなかったのです。そのことを残しておきたいと思ったのです。

伯父は、この河内町で10代目のみかん農家として、代々受け継がれたみかん畑を守っていました。その伯父が、はじめに「河内に保育園を作りたい」と言い出したのは1970年頃だったそうです。約10年の時を経て、その話が実現しました。実現に至る過程には、伯父だけでなく、土建業を営んでいた伯父、今はもうありませんが河内で開業していた寺本医院に嫁いだ伯母などが、親戚や地域の方々を巻き込んで保育園創立に向けて東奔西走したと聞いています。

今の園舎が立っているこのわずかな平地を手に入れるため、代々続いたみかん畑の大部分を手放したとも聞いています。伯父はそうやって園を作っておきながら、自分は何の役職にも就きませんでした。初代理事長は寺本医院の院長、園長には私の父が就任しました。私の父は当時、県外で教会の牧師として働いていましたが、教会併設の保育園や幼稚園の理事長の経験があり、母も幼稚園教諭としての経験があったことなどから、「ぜひ河内に！」と説得され、母や伯父を中心とした母方の親戚たちの強い熱意によって、父は牧師職を退き、園長を引き受けることにしたそうです。

そのようにして、この保育園が開園したのは、42年前、私が小学6年生になる春でした。

伯父たちは、園が出来た後も私財を投じて園の経営を助けてくれていました。さらに地域の方々にも温かく見守られ、たくさんの方々の協力を得ながら、これまで園を続けていくことができました。

最初に園をつくると言い出した伯父が、なぜ理事長や園長など役職に就かなかったのか、そもそも、なぜ保育園を作ろうと思ったのか、疑問に思った私は伯父に尋ねたことがあります。伯父は、幼少時とても甘えん坊で、小学生になっても一人で学校に行くことができず、毎日毎日、母親に手を引いてもらって、しぶしぶ学校に通っていたのだそうです。それが内心とても恥ずかしかったし、大人になってもずっと忘れられない。だから、河内の子どもたちのために小学校に上がる前に通える幼児教育施設があった方が良くと思ったとのこと。また、自分は保育に関しては素人で、教育に関する資格は何もないので最初から役職に就く気はなかった。地位や名誉、あるいは金儲けが目的で保育園を作ったわけではなく、純粹に河内の子どもたちのことを考えてのことだったと話してくれました。

私の両親に託されたこの園の運営も創立以来40数年にわたり、常に子どものことを第一に考えたものでした。開園当初などは、あちこちの園が、定員外の子どものみを安い保育料で非正規に入園させるいわゆる“闇入園”の子どもを受け入れたり、取り決めて禁止されていたスクールバスを走らせたりしていました。そうした事実を役場の人も知っていたが黙認しているような時代でした。そのようななか、私の父は「子どもたちの手本となるべき大人、ましてや幼児教育を行なう者が、そのような不正なことはすべきではない」と一切曲がったことはしませんでした。おかげでうちの園は定員割れが続いたりして、経営的には非常に苦しい思いをしてきましたが、私自身もそのような誠実な運営をしてきた両親を誇りに思っています。

成り立ちがそのような園なので、父は、園の後継者を伯父の長男にと考えていたようですが、不幸にして伯父の長男は病気のため56歳の若さで亡くなりました。伯父もわが子に先立たれ、さぞ辛い思いをしたのではないかと思います。

私は私で、当初は保育園を継ぐなどは考えておらず、別の道へ進もうとしていました。しかし、大学受験で2度のチャレンジに失敗し、3度目の受験の際に「3浪するぐらいなら保育園を継ぐことも考えてみたら？」という親の勧めで福祉系の大学を受験しました。結局、その福祉大へ進むことになり、保育の世界に身を置くこととなっていったのですが、私の話はまた別の機会に…。

伯父はもともと子ども好きでした。歳をとっても子ども心を忘れていないというか、子どもの気持ちがよくわかり、時には子どもと一緒に家族にいたずらを仕掛けて驚かせるなどして、よくふざけていました。そんな伯父でしたから私を含め、孫、ひ孫たちからも、とても慕われていました。私も幼少期、熊本に遊びに来ると両親よりもその伯父にべったりで、どこへもついていっていました。切ってきた竹などで器用に仕掛けを自作し、川でカニなどを獲ったり、山や海などにもよく連れて行ってくれました。多少危ないことなどでも私がやってみたくと思ったことはやらせてくれていました。今思えば、私がアウトドアを好きになったり、多少危ないことでも子どもたちがやりたがっていることはやらせてあげようと考えようになった背景には、子どもの頃にそうやって伯父に遊んでもらった原体験があるからなのかもしれません。

こうして振り返ってみると、伯父の思いから始まり、ここには書ききれませんが、いろんな人の思いが重なり、本当にたくさんの人たちの思いが、今園を任されている私たちに託されているのだなあとしみじみ感じます。そろそろ園舎改築も本格的に考えなくてははいけません、これからも子どもたちのためにがんばっていきたくと思っています。